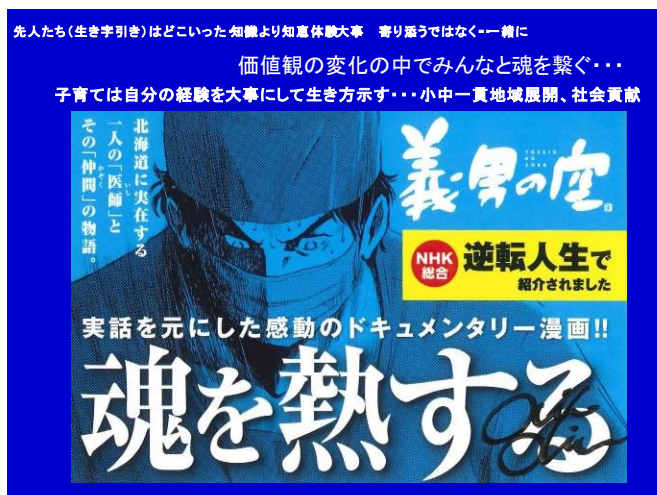


【後志教育講演会】

「渡る世間は嘘ばかり・・・Part II」



とまこまい脳神経外科
岩見沢脳神経外科
大川原脳神経外科病院
別海町立病院
にわとりファミリー

小児脳神経外科部長 高橋 義男

第2弾よろしくお願ひします。

1. 合理的配慮と気づき

今リーズナブル・アコモデーション(合理的配慮)という、いろいろなハンディキャップに対し周囲の人々がどう対応するのかというのがあるんですけどもね、いろんなハンディキャップがある子や、ある人に対してどうすればよいかという話の1つなのですが。前回の質問だと思いますけれども、その対応の仕方は、頭で考えるよりその人を見ながらどのようにするかというような「気づき」になるのだと思います。例えば、今回こうやって皆さんと話している時、先生座って話して下さいと言っても、机と椅子との高さの不具合があって机の上が見えず、パソコンが使えず話せないから、椅子をもう少し高くしないと講演が上手くいかない。こういうことに対して自然な対応、気づきというのがすごい大事なんだと思います。状況に合わせて椅子の高さを変える。ただそれだけなのですが今の時代はまずマニュアルありきなため、考えず、出来るのに対応もしなくなっているのが現実です。状況を見ての速やかな、しなやかな対応がなくなってきている。本日のテーマである今の時代の子育てもマニュアルが先行しいろいろな気づき、気配りがなくなって、声かけ、見守る、一緒にやるが少なくなり自然にがなくなってストレスが増え、子育てに大きな影響を与えていると思います。昔はできていたのです。

2. 小児脳神経外科の意味するものと地域展開の必要性

私は、小児脳神経外科で38年、地域に出てきて18年の経験があるのですが、皆さんの仕事とすごく似ています。小児脳神経外科の特徴は、成人の診療科と違って、急性期の治療

だけでなく子ども達が大人になるまで、社会に出るまで一緒に歩むことです。彼らが社会に出て、位置づいて初めて治療が終わる（図1）。頭部打撲での血腫とか脳挫傷とか、先天的、後天的な水頭症、中枢神経疾患とかいろいろな脳血管障害や脳腫瘍など、その時々治療しますけれども、そのとき子どもが20年後どのようなかということを目測しながら初期治療

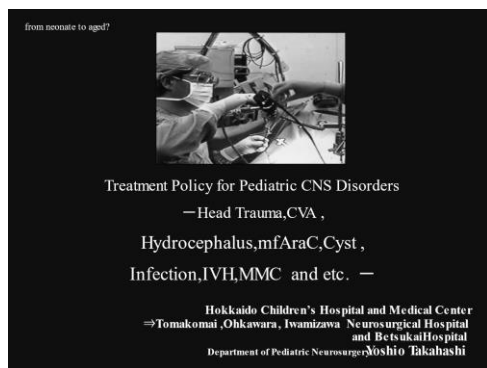


図1

する。その時こっぴりの治療ではないという事です。皆さんは、小さいときからその年齢に合わせて将来を見越して教育しますが、私も同様に将来彼らが成長して“青春、人生を謳歌”できるように、そのために今何が必要かというような治療内容になるし、先生方もそのような教育になると思う。医者になって初めの5～6年は教科書的なその場のことしか考えられず、このような本来の医療に気が付きませんでした。若い先生たちもそうだと思います。私は皆さんと同じように子ども一人一人の生活状況によって方針が異なる、大人まで続くオーダーメイドのそして見守るという治療をするのです。その時限りの治療ではないのです。皆さんも医者って何も解らないくせに偉そうに感じていると思いますので、私は長谷川先生がこのような機会をつくってくれたことに大変感謝しています。小児神経外科の治療の流れは教師そのものにかかなり近いのです。ですから、治療の方針は他の科や大人や高齢者の分野と明らかな異なりがあります。このようなことを世の中、特に医療者自身が解っていないので、子ども達が大人になった時の移行期などでどう医療者が対応するかなど大きな問題になっています。小児医療は子どもの時に大きな病気や怪我をしたら大人になるまで見守るという継続治療が特徴で、医師には子どもの将来をみた、ひらめきと気づきが必要になるのです。小児神経外科の医療の展開は子どもや親と一緒に進む共同作業です（図2）。

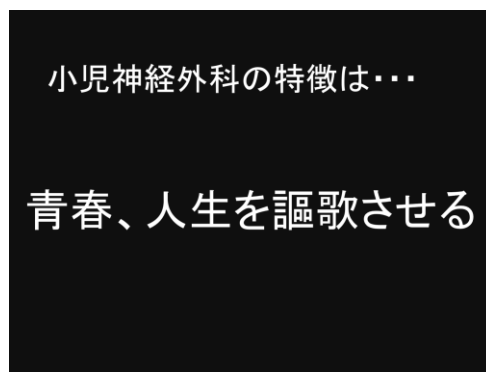


図2

そして、もう一つ皆さんご存じかと思いますが、この子どもの医療や教育の本来の意味を生かすには現状の大都市では組織やルールが優先して難しくなっています。田舎と言ったら語弊がありますがけれども、地域の中で、地域が家族であるそういうところ、温もり、思いやりのある、寄り添うところでないとなかなかうまくできない、本来の子育てができないと思います。生活空間が子どもから高齢者までの家族としての流れのあるところ、色んな人が混ざっているところでないとなかなかイメージする子どもの教育は今や出来なくなっている。忘れかけた“姥捨て山”の本質を肝に命じながら聞いていただければ助かります。こういう空間は、昔は都会の中でもありましたが今はほとんどない。“核家族化”は子育てに影響する多くの問題を生まれました。“都市は変わってしまいました”。

3、触れ合う子育てと現実の課題

では、始めます。「子育ての根本」で大事なこと、医療もそうですけれども、教育もそう。「触れ合い」です。つまりフェイス・トゥ・フェイス、スキン・トゥ・スキン、その中からお互いに何かが交信できる。皆さんもご存じだと思いますけれども、このスキンシップすることによって“オキシトシン”という幸福ホルモンが出ることになっています。このオキシトシンという幸福ホルモンが出ると、「信頼関係」が生まれてくる。小さい時の抱っこ、声掛け、入浴を思い出して下さい。

今問題なのは日本でも、世界でもいじめが多発しています。それを防ぐのに触れ合い、信頼関係ということがすごい大事になりますが、今それを醸成する子ども時代の環境が悪いということです。うまくいかない多くの理由は、今恵まれすぎていて子どもが家の中でお手伝いや働くことが少なくなり、お互い様分かりづらく、黙っていても食べ物もらえるし、更に時間の余った大人が子どもの間に入り込み何でもやってあげたりして、子ども同士の信頼関係を創る機会を崩すなどいろいろな問題が生じているからです。子どもは初め親や大人と、その後は子ども同士で共に行動、触れ合うことにより信頼関係ができていきます。けれども、大きくなるにしたがってわかったふりする大人やメディアなどが創り出す周囲環境、国のプロパガンダによってその信頼関係が崩されバラバラになっていきます。今や形だけの人間関係、集団となりストレスだらけで、信頼と安心のない生活環境を作っています。ですから子どもが大きくなるにしたがって予測しておかなければならないことは、仲間のふりした付度と騙し。そんな感じが生活に蔓延するので、「小さい時からのストレス対応が必要」となります。「今の時代はやっかいな、残念な人間社会です」。

今や私達は子どもの能力を伸ばす努力をするとともに、何が本当かを知る力とストレスに耐え得る力を小さいときから作っていかないとならない。現実を言うと「問題のある今の社会の中でどのようにして子育てをしていくかということが私達の一番の課題」になります。これは子どもの問題だけでなく、大人の問題でもある。簡単に言うと多くの大人が幼稚で新人類と言えるような時代になっているので、「新たな子育ての戦略」が必要である。色々なものを与えずぎて、考える力を失わせたのでそれを取り戻すことと、現状に合わせて「子どもたちや大人に人間とは何なのか」という原点を「新しい角度で人間らしくを教える」ということが大事になるのだと思います。

資本主義は悪魔であるとマイケル・ムーアが言っていますけれども、昔はまだよかったのですね。日本も昭和ぐらいまでは体を使って覚えるでよかったかもしれないですけれども、今の時代はいろんな形でマニュアルとか、SNS、メディアを通しての人間創りというふうになってきていて、肌を触れ合っただけの思いやり、助け合い、寄り添うというところがなくなって、それを醸成する経験、体験というのがなくて、“スマホ頼みで、ネット頼みで情報を得る”で「思考停止」、そのような時代になってしまった。その結果「状況判断が出来ず“現象としての軽度発達障害”が増えてきている。国は問題を地域に放り投げ」。これが前回までの話です。

4. 思考停止で、脳自体が変化した？時代の変化で諦め、傲慢、発達障害

余市が近いので、マッサンが出ていますが、今では地域でも何となく面白ければいい、というような享乐的な流れで、心と心での触れ合い、体で経験する事がなくなりましたし、考えないし、デジタル化、テクノロジーだらけの中で本当の楽しさ、幸せが分からない時代になった（図3）。前回お話ししたように、「狂った世の中」の影響をうけ、だんだん「価値観が変化」して

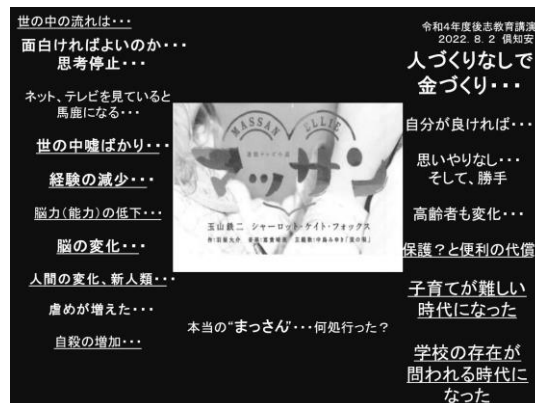


図3

きて、「人間自体の変化」が起きている。それに対してどうやっていくのか？私たちはこの現実を認めて、小さいときから人間らしく・・・の生き方を難しいけれどやらなきゃならない。“新たな子どもの育成、教育の時代”です。

時代の変化で「発達障害がかなり増えてきた」ので、NHK教育などのメディアで子育てをよく話していますが、**“子どもの気持ちが大変なの”**だけではなく大切なことは、テクノロジーが大きく変化した世の中で**“いかに心を通わす子育て”**をするか。本来、国自体がいろいろ時代を分析、認識して解決していくというか、方向性を持たなければならないけれども、そうっていない。発達障害には色々な原因もありますが多くの場合**「この現象は社会問題」「子育て環境の変化」**として生じてきているのです。虐待もその傾向があります。その質が変わってきてアメリカでは社会問題としてとらえ、DCFS (Department of Children and Family Service) という国も関与した新たな支援組織が介入するというようになっている。日本でも虐待が社会問題なのに国にその考え方がなく、地域、学校に押しつけ責任放棄、怠慢、傲慢です。

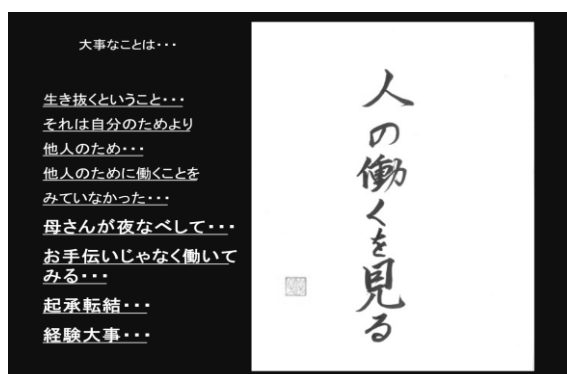


図4

という状況に恵まれていたのです。だから、夜遅くなって、たまたま目が覚めて戸の隙間からちょっと光が漏れているから、はっと見ると、お母さんが夜なべをして、私の場合は毛糸のパンツを編んでくれたりだとかして、働いているわけですね。それを見て親への感謝というのが生まれてきて、互認互助、無償で働くことの大切さ、自分は何をすべきかどう生きていけばいいかというのが分かったのですけれども、それが今の時代はなくなってきた。

40年前の昭和の時代は、“どんな子どもでも光り輝く為^{ため}に生まれてきた”のですけれども、今の時代はそんな方向はなく、みんなバラバラ、更に周囲環境の変化に伴って発達障害、ストレス障害、不登校が増えている。何がまずかったかという、皆さん今の子どもを見ていたら分かるかもしれないですけれども、昔は人が働くのを見る、自分でやると

今、ぼっと光が見えても、親がビール飲んでテレビ見てたりゲームしてるやつとか、ユーチューブをやっている親しか見れない。特に3歳以下の子どもの育て方は大事なのですが、親の背中を見せるのではなく、国はなんでもやってあげる、褒めるだけ、可愛いだけの子育てにしてしまった。三つ子の魂百までもどこ行った。親も勝手に、子も勝手（図4）。

このような楽しければよいそして好き放題の時代、もはやこの現実是不変なのでこの事実をある程度認めて子育てしていかなければならないのです。昔はキャッチボールの中で子どもは育つと言っていたけれど、今の時代はキャッチボールがドッジボールになっている。キャッチできればいいですけども、返したらぶつけられるから返すわけにはいなくて、違う弱いやつにぶつけるというような時代になってきている。後で出てきますけれども、昔は出来なかったら頑張ることができるようにする、周囲は見守るというストレスに対してレジリエンス（弾性力）をつけるがあったのですが、今は相手の弱点を見つけながらいかに自分が優位に立つかという時代。ですから、世の中にある現象は、天災というよりも人災なのです。いじめをはじめとしてですから、世の中が隠していますけど世の中の流れが殆ど営利を目的として動いている。だいたい前の東日本大震災、その後の福島のこと、地球温暖化、プラスチック地獄なども時間がたてば更に分かってくるけれども、人間としてのボロが出てきます。今ある天災は全て人災がらみなのだということです。コロナ、その問題もウィズコロナというふうに言っていますけれども、なぜコロナが出たか、なぜクマが沢山街の中に出てきたのか、これも人災がらみだということです。だから、私たちの捉えとしては、今あることはほとんど人間自体の問題なので、その認識がないと子育ての問題は解決しないのだということです。逆に人間が作り出した問題だから全て解決可能なはずですよ。

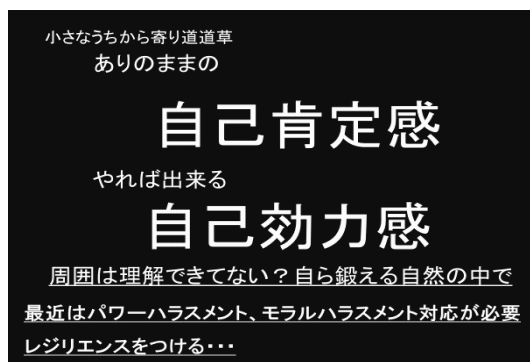


図5

昭和の時代から令和の時代になった。昭和は相手の技術を眼で見て盗むとか、集中して覚える、出来るまで努力するが基本だった。小さい頃から親達、周囲の人たちがすることを見て覚えた。その結果、集中する、考える、我慢、尊敬、感謝があった。そして、“自分でやるから自己肯定感が出来て、ストレスにも耐え得るようになった”。そんな努力が必要な時代から今はマニュアルの時代、だいたいやってもらってできたつもり、親はいつも子どもにべったり、いわゆる過干渉、過保護、考えさせない。指導VTR、DVDもある。お腹がすいたらいつでも食べられるそういう時代になってきて子育ても見て学ぶからマニュアルでわかったつもりになったわけです。体で覚えるは死語になった（図5）。

5. 何故発達障害が増えたかと国の誤り

今回、後志教育講演会「渡る世間は嘘ばかり…Part II」ですが、軽度発達障害がなぜ生ずるかというPart Iの質問ですが、環境ホルモン、農薬など種々の原因もありますが、大きなところは社会状況、生活環境、子どもの育て方が関連している「社会問題」であるというこ

とです。落ち着きがなく、一見元気そうに見える、状況判断なし（空気が読めない）、集団行動が難しいなどを特徴とする。発達障害の疑いのサインになるのは夜泣きが増えた、おねしょが増えた、キレるのが増えた、1人で遊べる。1人で遊べたらよかったと思ったら大間違いで周囲とコミュニケーションがとれなかったりする。一見正常に見えるから周りの人は無責任にうちの子どももそうだよという。普通だよと。このくらいのときに生育の指導が出来ればよいのですが、周囲が気づいた時にはもう遅い。子どもたちは状況が読めない、動きまわる。たいてい親にも問題がある場合が多い。去年お話ししましたが、去年お話ししましたが、「人間の証明」という森村誠一の本がテーマにした本があります。昔は母性本能が重視されてたのですが、今や母性本能ってどこに行ったかよく分からない。ボンディング障害といってもともと愛情をもたない場合もあるようになった。つまり、ある人ない人いるから、ない人の親子をどうするか。

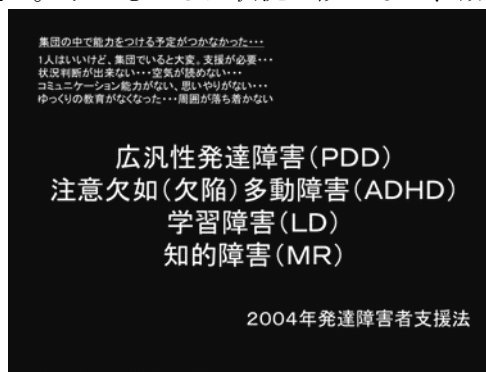


図 6

流れとしてはその親はどんどん他人任せ、知らないふりになっていますから、子どもに軽度発達障害が増えてくる。一見普通だけれどちゃんと聞いてない、落ち着きがない、話が通じない、コミュニケーションがとれないという、そのような子どもが確実に増えています。子どもの状況がそうだから必然的に大人の発達障害も増えている。親も大変。周囲の支援が必要です。ところが看過する（図 6）。

50年前、私が札幌医科大学に入学したときですけれども、大学立法というのがあって、学生運動が起きました。国の管理、傲慢さを、何とか変えていこうとやりましたけれども、国に肩透かしされ、学生達は我儘とされ今の時代になってきてしまっている。日本人はデモするけれど国や時代の流れに抵抗できないのです。民主主義と言ってごまかされ、押し切られる。例えばカジノは国民の60%が反対していても、国はそれを通していく。今は高校生諸君にも選挙権があるけれども、選挙で国民の意思が反映されるとは思えない。選挙は民主主義の根本と言っていますけれども、約2週間のお願ひしますの連呼と経歴だけで何が出来る人なのかわからない。候補者はタレント化して、色男であればいいみたいな感じになってきている、中年女性がキャーキャー。私が物心ついた50数年前から選挙、政治はこの傾向。騙しとごまかし、好き放題、ポピュリズム（大衆迎合主義）が主なので何も変わりません。皆さんと冬にお会いして7か月ぐらしかたっていないのですけれども、民主主義どころか日本は勿論、世界もそうで、抑えがきかず「いろんな形で地球がやばい」。好き放題というテレビやSNSの流れの中で見て見ぬふり、看過する、少しでもとどまって、このままいいのかをもう一度考えていかなければならない。早急に対応すべきは「衝動性と理解力低下と思考停止への対応」です。子どもたちの衝動性だけではなく、大人もそうです。多くの大人が発達障害です。通りすがりの殺傷、思いついたら止められない。それを看過する日本の社会。問題なのは傲慢さ、そして周囲の看過、見て見ぬふりです。外からみたら好き放

題と弱い者いじめ。今、ナチスがどうのこうのとブーチンが言っていますけれども、自分がナチスみたいなやつですね。「**私たちが認識しないとまらないのはいじめの常態化**」。いじめは人間以外にはチンパンジーぐらいしかなくて、普通の動物はいじめはないそうです。除け者にされたら出て行ってしまっ、一匹狼になる。狼は一匹になりません。狼は仲間意識が強く単独では生きないのです。

6. 時代が変わった・・・「モラハラ・パワハラの常態化」

私たちが考えないとまらないのは、今の時代の生活空間の悪さです。勝利至上主義、利己主義、大衆迎合主義が充満し、仲いいふりしているけど、集団の中で無視するとかのモラハラメント、パワーハラメントが普通。それが子ども園からある時代になった。人間は周囲を見渡し危険を察知し皆に伝え対処する動物で、みんな仲間だったけど、その特性がなくなっている。人間というのは信頼出来る集団を創り得る動物だったのにそれがなくなってきた。私たちはまずそれに気づくことです。そして、今ある集団の中でまだ残っている人間らしさを持っている子どもや大人を探し出し、リーダーシップをとってもらいその後をまかせる。宝物探しと新たな展開が必要な時代なのです。昔は自然と出来たこと、それを新たにしないとまらない変な時代なのです。

私はガラケーですけれども、今の時代スマホを持っていないとコミュニケーションがとれない。経済活動、社会活動が出来ない時代になっている。仲間に入れない。そしてスマホのある人はグループLINEを作って、そこに入ってしまう。いい仲間なら良いですよ。実際問題は皆さんが一番悩んでいるところだと思いますけれども、誰かにひっぱられて小グループをどんどんつくっていく。自死を選んだプロレスラーのように周囲が分からないような状況の中で、はまる、いじめられる、抜けられないという状態になる。人間は集団で生きる動物なんだという事の為にスマホがあるのに逆に仲間討ちしている。いじめられたり困っていたら、みんなで助ける動物だった。それがメディアとテクノロジーとデジタルの中で知らんふりモラハラメントになっている。「**いじめの放置と積極的看過**」、「**いじめが増えたというよりより人間の本質の変化**」です。

7. みんな同じ人間だべや・・・？

戦後77年、沖縄返還50年、相手の気持ちを察することや経験を大事にした、昭和の時代。その後、平成・令和とテクノロジーの進歩により知識と情報を主としたマニュアルの時代になって、考えない、好きなことだけをするという、「**思考停止の時代になった**」。そんな状況だからAI（人工知能）が優位となりされるがまま。そして人間はゲノム操作され多様性がなくなり滅亡に向かう。「**昔は多くのお互い様、多様性**」がありましたからカバーし合い障がい児や障がい者は少なかった。みんな同じ人間だった。今は少しでも外れていたら、少しでも支援が必要になったら障がい者、障がい児として普通から隔離する。このように社会が人間として集団で生きぬく力を失って、「**もはや生き方の転換期**」なことは明らかなのです。社会が弾力性を失った中で、子ども達にどうすべきなのか？何を繋ぐか？今まさにしないとまらないことは「**人間の本質を失わないため**」にどうやっていくかを真剣に考える。

私たちの能力というものを、知識だけでなく体を使って魂、ソウルとしてつなぐ。「多様性は可能性」ということ、昔に戻ってもう一度きちんと作り出す「みんな同じ人間だべや」。

今の社会は、違いをどんどんつくって行って、出来なければ福祉という言葉を手くつかって商売につなぐ。今の時代は自分たちの経験ではなくて、情報の中、知識の中でのものを考える。その結果、努力と我慢とコミュニケーションと尊敬と感謝が減った。コロナの中でマスクしているから口の形が見えないからわからないとか言っていますけれども、そういう問題ではなくいろんな努力でコミュニケーションはできる。長谷川先生とも話しましたが、駄目だと決めつけているだけ。昭和から令和になって、マニュアルになり、デジタルだらけ。昔、遠方とは音とか狼煙とか光でコミュニケーションをとったこともあった。相手をわかろうとした、だから、どうやって講演の意味を得るのかも努力だと思う。人間は多様であること、それを集団の中で生かし、人間の生き方をもっともっと磨いていかなければならない。ここ3年間、諦めの世界であるけれども、マスクをしていればある程度顔と顔は近づけられる。「コロナの中でファーストペンギン精神」が必要。私たちはテクノロジーを重視する新人類の出現を認めつつ、「もともとあった触れ合いのコミュニケーションを主とした子育て」を続ける。「昔の香りは残そう」。

こういう世の中になったのは大人が、教育が悪いと言う人もいるかもしれませんが、認識しなければならないのは「国が悪いということだ」。分析しないし、方針を持たない、それを「国が認識していない」。私達は「これは社会問題で少なくとも国が狂った世の中を作り出した結果だということ認識して対応する」。子どもを見守る、寄り添うだけでは子どもを守れないから、「先生たちも私も子どもと一緒に地域の子どもは地域で育てる」。私の小児脳神経外科の、そして先生たちの特徴も、“寄り添うだけでなく一緒に進む”。いつも一緒にいなくてもいいのです。短い期間でも深く入って、触れ合いがその子の心、つまり“脳に信頼として残っていく”。この新たな時代の中で、どう生かすか？子育てとは知識だけでなく、「魂（ソウル）をつくること」。なかなか出来ないのは親に問題あるし、家庭に、地域に問題あるし、国に問題がある。何とかできるのは、地域です。だから頑張ろう。

8. 今の世の中これからの世の中・・・

これからは、もっとひどい時代になっていきます。心の繋がりはなくなっていく。どこかでストップかけないととんでもない。これからはSNS、ロボットだらけ、ドローンだらけ、サイバー攻撃いろんなことがあります。そして、AI時代になってきて、今の時代の喋りを減らした思考停止のつけがまわる。普通の人間とAIの共存、そのあとはAIの席卷とかそういう問題まで出てくる。そして、人間とは何なのか解らなくなって、ゲノム操作も行われていく。

昔に戻ってみよう、ホモサピエンスの時代、縄文時代そのときはみんな仲がよかったらしい。けど昔には戻れない。子育ての難しさ二十数年前ぐらいまでは理由を愛情のボタンの掛け違いと言っていました。今振り返ってみるとボタンの掛け違いでも何でもなかった。この新たな時代、新人類が増えてきた時代の中でどうするか？昔はみんな貧乏だったし、必死

で生きた、互認互助が当たり前、子どもがいなくなれば町内会みんなまで必死に朝まで探した、子どもたちを隣近所みんなで育てるが普通、それが今はなくなってきた。子どもをみんなですぐするか、人間としてどのように伸ばしていくかがなくなった。“好きなようにしていいよ” “楽な方を選ぶんだよ” “苦労しなくていいよ” になった。社会も「親の変化、子育ての変化に気づいていなかった」。情報とテクノロジーとメディアが家の中に入ってきて、「親も子どもに何を大事にさせるかを見失った」。その結果、育児放棄、愛着障害、発達障害になってきた。そして、そんなところで止まっていない。自分がすごい困っているのだというのを認めてもらいたくて、代理ミュンヒハウゼン症候群とか、子どもを故意に病気にして、この子が大変なので私が大変になって、虐待の変形バージョンまで出てきている。

家庭の問題と捉えるかもしれませんが、これは今やどこでもみられる社会問題。国自体が問題。国は国民のことを経済、金儲けの対象としか考えないから「この流行」が出来た。例えば医薬品も人を救うより、どうやったら儲かるかというふうになっていますから、本人よければ副作用なければどんどん使いましょうという時代。認知症にしる鬱にしる発達障害にしる、どんどん薬が増えていっている。病院自体も商売で、病院に行ったら病名がつき、薬は出さないと行ってセットで薬が出て、次回の検査を予約する。つまり医療経済と言って、病気で治療はなくて、商売に変わってしまった。患者さんを何とかしようではなくて、金になるのかならないか。懐かしいですね。“患者さまは神様です”。日常生活内容もそうで、お互い様ではなくて、商売、儲け、得をするに変化している。“ギブアンドテイク”。ですから過剰診断と過剰治療とか過剰診療というのはもうざらになってきた。医療費がどんどん増えてくるどころではないのですね。最近よく聞くけいれんやてんかん、100人に1人ぐらいの発生率、今は意識なくなったら何でもけいれんとなって、どんどん薬を使うようになってきています。そんなことから高齢者のてんかんも増えた。病院行ったらあつという間に病名ついて薬出て。時間があれば検査されて入院。薬作れば病気が増える。

苫小牧ではこのようなことがありました。15年前ぐらいにミートホープ事件という嘘つきの話。ミートホープ事件が提起したことは、今の世の中で非常に大きい意味を持つ。なんの肉かわからずに、何が混じっているかわからず、雨水まじりでも安けりゃよいでみんな買う。わかっても行政は国民の健康を知らんふり。もともと日本は国民の健康を気にしてない。だから何でもかんでも外国任せ。TPPという話があって、この輸入や何かにしても、皆さん御存じのように、今回のコロナの中で明らかになっていたと思いますけれども、ワクチン、食品や医薬品、医療品というのは国民のために大事なもので、ところがほとんど国は関与しない。厚生労働省は国民の健康と安全を守るためにあるのにどこいった。日本でもようやくワクチンを作るになっていますけども、なかなか出てこない。皆さん、ワクチン何回も打っているが、本当にワクチンが効いているのかどうか、副作用はどの程度なのか自国製でないから分からない。流通しているのは外国製。外国はワクチン作ったその分の資金をとり返さないとならない。だからまたワクチン打とうというふうになります。あと10回ぐらい打たないとワクチン終了にならない。パンデミック、人の弱みにつけ込んで健康を守る

と言いながら、医療は金になる。そして、はっきりしているのは日本は外国に弱い。中国の毒入りギョーザ事件はどうなった。

9. スマホ依存とスマホ中毒と地域対応「地域の子どもは地域が守る」



図7

今、私達の伝達手段は表情、動作、言葉を発するから状況、雰囲気が読めないスマホ伝達に移った。学校の連絡も全部スマホになってしまっています。スマホとどう付き合うかというより、それを飛び越してスマホをやめるにやめられない状態になっている。隣にいても喋らずにスマホでメール。「スマホ依存」。スマホの使いすぎでスマホネックから、斜視から、学習障害、いじめ、不登校、ひきこもりなどいろんな問題が起きています。既に言われている、

テレビゲームをし続ける子どもに視力低下、イライラなどが多い、発達障害、ストレス関連障害が多い。テレビ、ゲーム、ネット、スマホこれらは脳に影響を与えて、怒りやすい、覚えられないなど生活能力が低下する。やめたいと思うけれどもやめられない。「スマホ中毒」。「命の次に大事なものはスマホ」。

中毒になったら、脳を壊します。それが原因で記憶障害、高血圧、糖尿病とか、生活習慣病になる。癌にもなるかもしれません。脳には影響が確実にある。斜視、弱視どころか思いついたらやってしまう脳、金になればいいと思ってやってしまう脳。私は全道各地に診療に行っていますけれども、別海で聞いていたら、この間の観光船の問題は言うこと聞かないからいつか転覆するのではないかというような感じだったみたいですね。熊を見ようと岸ぎりぎりを通って、波がじゃばーん。そして天候が悪かったら当然起きるでしょう。「社会が変化して忠告が聞けなくなってきた」ということで、「渡る世間は嘘ばかり・・・Part I」は人間が狂ってきた、その現実と対応の話でした。国がちやんとやらないから、大変な事態になっている。とにかく私たちは世の中が狂っていることを認識して地域の中で新たな対応を頑張ろうということです。子育てをこの地域の中でどうにかしていかなければならない。俱知安町はそういう中で最後の砦になるだろうと。防ごう、都会化って、約10年前イベントやって雪ダルマ、羊蹄山とともに、頑張ってきた。そうですね。

これからPart IIに入りますけれども、今の狂った現状に対応するにはみんなの力で、社会適応能力、地域問題解決能力、互認互助というものをもう一度とり戻すということです。本当のスキんシップというのをとり戻し、触れ合いでオキシトシン出して、幸せを感じる。都会は出来ない、出来るのは地域ですから、今の現状ではまず田舎は地域の都会化を防ぐということが大事です。新人類とは共生できなくとも



図8

共存していかないとならないですから、「地域の子どもは地域が守る」。「防ごう地域都会化」（図7、図8）。

10. 地域にも虐待は多い、それに対する地域の役割

虐待について聞きたいというような話があったので、虐待に関することを持ってきました。苫小牧に着任して1年目、17年前ですけれども、この頃苫小牧は虐待で有名で、子どもに食事を与えず放置して死亡させてしまったという事件がありました。この子だけでなく類似のことは苫小牧やその近隣でも数多くみられ、中央にいたのでわからなかったのですが地域にも子どもの虐待が多いことを私は認識しました。地域ではネグレクト(育児放棄)が多く、その結果命の危険だけでなく子どもの脳が変化することが予測されました。嫌な言葉とかどンドン言われたら聴覚野、無視されたり変なものを見せられたら視覚野が萎縮してくる。虐待で問題なのは、身体的なこともありますけれども、脳自体を変えるような不適切な養育が生まれたときからずっと続いていて、脳に変化を起こすということです。更にまずいのは、保護されたりしても専門の人が関わるわけではなく、その後も不適切な養育が続く可能性が高く、回復のチャンスが乏しいことです。時間とともに反応性愛着障害とか反抗挑戦性障害が出て来ます。メディアもよく勉強していないところがあって、被虐待児は大人になると虐待を繰り返すと言われてはいますが、繰り返されません。さっきから言っているように、小さいときから誰かが、そばについてあげていて、信頼関係を築くと、それまでの成育環境が悪くとも立派な大人になるのです。私の経験から明らかです。先ほど控え室で話したのですけれども、レッサーパンダ少年という事件を覚えている人いますか。もう大分前だから忘れていたかもしれないですけれどもね。養護学校の先生がずっと子どもに対して関わっていて信頼関係があったところに、養護学校卒業を機に、もう関係ないからねと言われた。先生との信頼関係が無くなったことがショックだったのでしょうか。それからしばらくたったら、東京で女の子の首絞めて殺して、北海道に帰ってきて、室蘭で捕まった。しゃべらなくとも長い間関係性を保ち続けているということが重要だと思います。

今から五十数年前、小児脳神経外科というのが始まりました。この頃北海道は中央から大体10年遅れ。虐待は少ないけれどもありました。昔は過剰な躰のようなものでした。私の虐待第1例は、母親が本州から北海道に嫁いできて、友達、親戚がいず孤独。子どもはギャーギャー泣くしと、子どもをついついたたいてしまって硬膜下血腫でした。その後北海道人の父親が仕事スタイルを変えて母親と頑張った。そして幸せになった。昔からそうですけれども、子どもに対して愛着がない場合があるから、そういう時は周囲の支援が必要です。第2例は今から15年前、苫小牧に着任してから2年目ぐらいのときに、著しい知的障害を主訴に20歳位の患者さんが受診しました。頭に手術された跡がついていて硬膜下血腫の手術歴があると思われました。成育歴を聞くと治療後ずっと保護的環境の経過をとっていて、多動と知的障害が改善のないまま続いていました。親自体の愛情がない、地域の愛情もなく、放置され、脳にひどい損傷がなくとも著しい障害になった典型例でした。第3例は地域での硬膜下血腫例です。眼底出血が見逃され治療は遅れましたが何とか命をとりとめました。ここは

5人兄弟だったなどもあり、親が5人の子どもを育てられないから、児相が介入しましたが火事があったら3人死亡。生き残った2人はそのような環境だからということで、児相に保護されました。お兄ちゃんのほうは問題児になって、脳の状態は良いのに、目つきがおかしかった。反応性愛着障害、反抗挑戦性障害と診断されたので私は頻回に受診させ、その結果だんだん改善してくるのですけれども、やはり時間をかけて信頼関係をつくっていくということが大事と思われました。4例目は小児センターの経験ですけれどもね。生後2か月で身体的虐待。実の父親に投げつけられて、頭の血管が切れて出血中の硬膜下血腫、瞳孔が開いて、脳が腫れていて切開した脳を被う膜(硬膜)を閉じれず、脳を冬眠させるような大量バルビタール療法をやって、何とか命は助かり、乳児院、社会的養護施設で保護されていました。15歳半ばぐらいからイライラ、好き勝手に目立つということで、愛着障害、発達障害の傾向を認め、同じ施設の小さな子をいじめるがあり受診の方法が検討されました。社会的養護という専門的に保護する手段がとられていたわけですけれども、ただ預かっているだけになっていた。子どもは放置され知的に遅れた。こういうときも学校の先生と同じです。深く介入して、子どもとの信頼関係をつくって行って、いつも一緒の関係になっていく。年に1回から4回外来に来るようにし、来た時には時間をかけた面談を持ち、困った時はいつでも連絡をとれるようにした。勉強もしなかったのがそのうちやるようになって、札幌から苫小牧までバスで1人で受診できるようになって、顔つきも変わった。子どもの世話をするような仕事をしたいと言うようになり、だんだん顔や態度全体余裕が出てきて、出られないと思っていた成人式に晴れ着で参加し、周りの子どもと同じ状態に近づいた。仕事に就いて、社会に出たけれど、周囲の大人からのモラハラ、パワハラがあるそうです。私の仕事はこれからものです。先生たちと同じですね、小児脳神経外科というのは。子どもといつも一緒にいるわけでないけれども、親と子の様に将来まで何かでつながっている。家族です。最近ようやく医者とは何か、高校時代の先生とは何かがわかってきました。私の担任の先生は一年前に逝去され、もう話をするには出来なくなりました。心の中にはいつもいます。そして、励ましてくれます。

虐待の治療方法は、命を救うだけでなく魂を救っていかないとならない。予後に影響を与えるのは周囲の環境です。先生方がやっていることは、子どもに出会って育てているというだけでなく、命を救っている。そして、魂までも救うというチャンスを持っている。大事なことは何らかの形で継続的に見るということ。親がたたいた、育児放棄したとか、親が犯罪的な行為をしたとかということも問題ですけれども、慢性期、超慢性期での成育の支援がなくて被虐待児が孤立化してしまうということが社会問題です。だから、そういう子どもが親になったら、また虐待があるのではない。社会全体が子どもを支援して、大人になるまで普通の子どもの同じような信頼関係を作っていく、そうすれば虐待の連鎖はなくなるのです。

要するに、先ほどの発達障害もそうですけれども、この虐待においても世の中自体がその認識をしっかりとしていないということが問題です。これは私が日本神経外傷学会のシンポジウムの中で話したことです、実践としては子どもに関与した小児脳神経外科医、周囲の人

間など、その役割がすごい大事になる。社会自体に育児の伴走支援がないし、親への支援がないし、地域にただ押しつけるだけ、何が「子ども庁」だということです。

この写真の中にクルーズンっていう先天的な病気で障害のある子がいますけれども、昔はハンディキャップがあってもわからない、大丈夫だったのです。子どもはうまく出来ないことがあっても、お互いにカバーしていた。それが普通でみんな同じですね、写真が白黒なだけではありません。頑張っ努力して自分でみんなで何とかする。子ども達は差を感じない。

ところが時代が変わった。だから今こそ教育が必要なのですけれども、皆さんが悩んでいるところは二宮金次郎となんでも諦めるという今時の近代化の訳分らないのが一緒になって田舎のよさがダメだになっているということです。教育の本質は成績だけではないので、田舎にある自然と推測力と判断能力と連携とコミュニケーション能力、いわゆる“仲間力その中子どもに生き抜く力をつける”ことです。田舎の子ども達は都会と違って、みんな家族のようにして育ち大きくなっていきます。うらやましい。

11. 私達は子ども達に機会をつくる・・・

大事なポイント、もう一つ。子育ての中の親の役割です。昔は親と子の分離が早かった。私自身は中学生から親と暮らしていません。私自身は中学生から親と暮らしていません。昔の先生たちもそうかもしれないですけども、昔の公務員は転勤すると何故か家族全員連れていかないと駄目だった。諸事情があつて、たまたまその都合がつかず中学生の時から1人、姉さんと暮らしたり、いとこと一緒に暮らしていました。親というか親の側にいる時間は短かったけれども、夜なべしている母親も見ていたし、休みなく一生懸命働いている母親とおやじもね、休みのときは家族のために日曜大工しているおやじも見ていました。短期間でもその中にいろんなことが詰まっていた。時間が短くても深い。だから、今は家族との時間が少ないとまずいと言われますが、ずっと子どもと一緒にいなくても、何かが残る、繋がるということですね。皆さんは不思議と思われませんが私たちには反抗期というのはあり



図9

ません。反抗期がないとダメだとか、反抗期が人間を伸ばすなどと言っている人が多いかもしれませんが、私の同級生もほとんどそうです、親に対する感謝はあっても、親に対して反抗するということはありませんでした。私らの時代は親に反抗したらごはんが食べられないから、言うことを聞きます。そこには感謝がありました。食べ物も少ししかないから、ごはんを残すことはありませんで



図10

ません。反抗期がないとダメだとか、反抗期が人間を伸ばすなどと言っている人が多いかもしれませんが、私の同級生もほとんどそうです、親に対する感謝はあっても、親に対して反抗するということはありませんでした。私らの時代は親に反抗したらごはんが食べられないから、言うことを聞きます。そこには感謝がありました。食べ物も少ししかないから、ごはんを残すことはありませんで

した。この“**相手を思う**”というのは家族の中では当たり前で、信頼に繋がりました。

先ほど過分に御紹介いただきました、いけませ夏フェスを毎年やりますけれども、テーマは互いに認め合う、助け合うということ。“**魂を熱くしていく**”という機会を子どもの時代から与えることです。浅く広くではなく、深く触れあう、1泊2日という短い期間でも互いに充実させ、繋ぐことが大事だと思います（図9、10）。

私の小さいときですけれども、3歳ぐらいです。3歳ぐらいはみんなかわいい感じで、嘘をつく。向こう3件両隣みんな家族でした。そして、小学校で集団生活、中学で大人に幻滅、小、中学校時代に5回転校し、いじめもありましたが仲間も出来た。そうこうしているうちに高校になって転校がなくなって友達が増えて、ちょっと態度が悪くなった。高校の部活はラグビーやって、顧問の先生は空手専門だったから自由にさせてくれた。みんなでやって、想定以上の結果を残し、先生があんな弱小がよくやると感激して泣いてくれた。こうして高校時代に一人だと不可能でも集団でやったらいろんなことが可能になるということを実感した。大学に入ったら、大学の同級生と話が合わずあまり遊ばなかったけど、中・高校生の友達とは遊んで青春を謳歌した。人生の前半で小さいときからの生活を一緒にした友達との経験が大事で、彼らとともに生き抜くこと、それが自己肯定になった。ストレスへの対応力が出来た。このような流れを私達は子ども達に少なくとも小学生ぐらいからつくってあげることが大事、そしてそのような機会をつくるだけで彼らの中に介入をしてはならないのです。

12. ストレス対応と寄り道、道草と自己肯定と生き抜く力

レジメにADHDの対処方法とストレス関連障害の対処方法を載せたつもりでしたが、少ししかなくてすみません。別の機会でもたまたまそのようなものを作ればと思います。これからようやくストレス対応の始まりです。先生たちはいろんなことを教えているのですが、教わることの意味するもの。子ども達は集団生活をやりながら生き抜く術を覚えていく。この集団で教わるという中で今の複雑な世の中ですから、新たに加えないとならないのはストレス対応、ストレスに対してどうやるかということを実感していかないとならない（図11）。

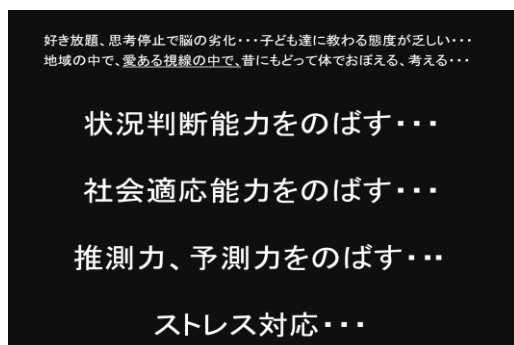


図 1 1

子どもの「遊び」、五十数年前ぐらいまではこういう“**寄り道・道草**”が普通にありました。そういう中でいろんなことを感じる。年齢も上から下まで、小さい子どもは大きい子どもを尊敬しながらというやつなので、ストレス対応もありませんでした。そういう家族的空間の中で自己肯定感、自己効力感が生まれ集団の中に位置づいていった。今はその流儀しかけがなくなりました。昔は安心した空間の中で隣近所の集団の中で育つ、お爺ちゃん、お婆ちゃん、親達は子ども達みんなの名前を知っており町内が家族でした。ストレスに対して「レジリエンス」という、回復、抵

抗、再構築という状況、それを仲良しの集団の中で体験する、痛みを知る、我慢、感謝を知る、その状況が身近にありました。「しなやかさ」という精神的な言葉でストレス対応が言われていますが、原点はやっぱり近くに寄って見るということ、感じるということ、スキン・トゥ・スキン、フェイス・トゥ・フェイスによって認識し、オキシトシンが出て、体がストレスに対応する。ところが今コロナで問題になっているだけでなく、世の中が複雑になってそれがなくなってしまっています。

自然も変化しました。ちょっと前までは、熊は孤立して山の中生活、集団では暮らさない、鹿は集団で暮らすから人間と同じように集団で山の中という感じ。これは昔小牧ですけれども、今の時代はもう、街の中にも鹿だらけ、里山は奈良公園で皆さんのところも同じですか。昔は日本オオカミとか、熊がそれなりにいて、鹿を食べてくれたりだとかして、お互いにうまく関係を保っていたのですけれども、やっぱり狼や熊のほうが嫌われたりして、自然界に人間の力が入って鹿がかなり増えたという結果ですね。鹿も頭いいから街の中だと撃たれないということをおかっている。熊もいないし安全快適。食べ物も山にはほとんどないけど庭や畑に沢山ある。人間界も自然界、動物界も変わったということです。

昔は子どもたちも周囲の大人や親の顔色を見て、結構状況判断をしていた。長谷川先生の時代の子どもは、今しゃべったほうがいいかなどうかとか周囲をうかがいながら判断したのですけれども、「世の中が変わって状況判断しなくなった」。今の時代好き放題でそのようなことが必要なくなったり、SNS、ゲームだらけの生活でも御飯はあたるし、考えなくても叱られないし「努力がなくなった」。働かなくとも、遊んでばかりでも生きていけるという感じですね。その結果、とんでもない時代になってしまった。昔は“働かざる者食うべからず”を言われて子どもも自分で出来る仕事をしていた。私の場合はストーブの火をつける係、テーブル拭きなど。だから、小さい頃から状況判断とコミュニケーションと要領とお互い様が普通に身についた。昔は尊敬する人、お父さん、お母さん。

13. 障害児の現実と就労状況、ストレス対応

今は思い込みだらけ、何とかかなりそうでも障がいがあると思われればダメというふうに決めつけられる。外見や検査で判断される。画像からおどろおどろしいものだというふう言われて、治療の適応外になってしまうのです。本当は治療できるのですよ。今はEBM (Evidence Based Medicine) というやつがあってどんな医者がやってもうまく結果が出る場合のみ治療が出来る。だから、すごいまい人がやったら出来るのだけれどというのは、標準でないという時代なのですね。皆さんも不治の病になっても、どこか探したらチャンスをつくれる医者があるかもしれませんから諦めないで、探してください。学校の先生もみんな同じかもしれません。医者っていう同じ名前ついているけれども、できる医者とできない医者がある。学校の先生も同じ給料かもしれないけれども、できる先生とできない先生がいる。それは仕方ないから、前向きにどういうふうにするかですね。

私はこうやって小児脳神経外科をやって38年、今4つの病院に行っていますが子どもの患者さんに加えて昔の患児達が大体20歳から30歳になって外来受診でやってくる。皆さ

んも同じだと思いますけれども、今、大人になった患者たちと小さい時こうだったよねって話しているのですが、子ども達は30歳ぐらいの大人になって初めてどうだったかということが本音で言えるようになるらしい。だから、長谷川先生とか年齢たっている先生は、昔の生徒たちと会ってどうだったか聞いてみるのがすごく大事なことになると思います。彼らの本音がわかり、今の仕事の大きな糧になる。

第38回日本二分脊椎研究会2022年7月18日 和歌山
 当院受診の二分脊椎患者で、社会融合年齢(超慢性期)になった22歳以上123例(74.5%)を対象として、現実把握(社会での就労形態)の評価とこれからの課題と方向性について考察した。
 また、外資で現状や悩み聞き取り、Apathy Scale, Depression Scaleなどを用い、生活状況とストレスの程度を検討した。

〈対象〉 22歳以上48歳未満の二分脊椎123例

I 群: 明らかな水頭症を伴う比較的重症な脊髄髄膜瘤(MMC)68例

II 群: MMC単独ないしは水頭症があってもシャント離脱可能であった40例

III 群: 潜在性二分脊椎15例

図12

〈結果その1〉 22歳以降の就労状況

	I 群(68例)	II 群(40例)	III 群(15例)
正 規 就 労	13例(19.1%)	6例(15%)	3例(20%)
就 労 支 援 A	2例(2.9%)	2例(5%)	3例(20%)
就 労 支 援 B	14例(20.6%)	16例(40%)	5例(33.3%)
生 活 介 護	20例(29.4%)	6例(15%)	1例(6.7%)
その他学生・家庭内など	19例(28%)	8例(20%)	3例(20%)
逝 去		2例(5%)	

→ 二分脊椎の22歳以降の就労生活実態は重症度に関係なく、生活介護から正規就労まではつきがみられる結果となった。その理由として…重症度に関係なく、ストレス障害傾向、鬱傾向があった。

図13

彼らの訴えから世の中の問題点を報告します(図12、図13)。脊髄に中枢神経の奇形である二分脊椎、脊髄髄膜瘤があって、治療しても両下肢麻痺、膀胱直腸障害を残す子ども達がどうなるか調べてみた。軽症から重症な脊髄髄膜瘤の子ども達の22歳以降の就労状況を見たとき、重症度に関係なく、ものの見事に就労時期の転帰にばらつきがある。かなりの軽症でも生活介護になっている場合が少なくない。なぜかと聞いたら、就労状況が障がいの程度に関係なくストレス、パワハラ、モラハラに左右される。かなり軽症でほとんどハンディキャップがなくても上司や同僚にいじめられるなどがあって、それに対応出来ずに辞めたり、仕事の内容が変わったり転職となるのが現実なのです。だから、学校の先生たちにも小学生位のときからストレス対応能力を身につけさせるように教えてほしい。本当はプレスクールというところでやってほしいのですけれどもね。今のプレスクールはうけ狙いなのではなかなか期待できない。

日常生活で介助が必要な子もそうでない子も、就労期にメンタル面の検査をしたらほとんど鬱傾向にある。そういう中からひきこもり傾向になってくる。この事例は20歳女性、杖歩行可能な脊髄髄膜瘤で親がいろんな手をかけて、成績優秀でした。おとなしい子だった。それがあだでしたね。高校時代から何でもかんでも、全部押しつけられてしまって。ストレスがたまって何も言えないままだった。高校卒業後、市の職員になって、就職できるとなっていたのですが、見込み就労期間に、市側の計画的パワハラをあびて、考えることが困難になり辞めざるを得なくなった。今はひきこもり状態でどうしようもなくなっている。こちらは33歳女性、3人兄弟の間に生まれ元気よく育って、何でも思うようにいていた。大学入ったが徹底的に無視されてコミュニケーションが出来なくなった。大学中退。この子の場合、高校ぐらいまでいい環境にあったんだけど、大学でモラハラがあって、その後うまくいかなくなって、せっかく杖で歩いていたのですが、今は鬱になり車椅子で介助が必要で施設生活になっている。

次は36歳女性、重症で車椅子で、3人兄弟の長女。弟が2人いて、牧場経営だったため両親が多忙で小学生頃より何でも1人でできるように育てられました。高校からは養護学校も寮生活。その後も、一人暮らしで四年制大学を卒業している。環境的に自力でしないとならなくて、そうしたらいろんなものが一人でできるようになった。自分の力を強めていく環境をつくったことが良かった。彼女の場合は結婚もしている。就労は一般企業の事務員となるも、上司のパワハラでストレスが多く、負けそうになった。ここまで見守ってくれた親に悪いと勉強しなおし道職員試験を受けて、学校事務勤務となった。このように、就労環境と社会環境に対抗するには個人よりも家族の役割が大きい、それが子どもの予後に影響する。この生活環境をなるべく家族とともに自分自らの力でうまく整えていくことがすごい大事なのではないかということです。社会は結構理解しているように言いますが、そんなに分かっているものではないのだということです。口ではいいこと言いますが、全くわかっていない。そのことに私達は気をつける。

北海道は特に広域だから対応が難しいとよく言い逃れされますが、全然それは関係なくて、やっぱり「人生を謳歌するようにイメージを描いて子どもを育てたい」。地域によっては就労状況がよい所もあるので夢を持たせたい。今の時代ですから子どもに青春を謳歌させるためには、小さいときからメンタル強化をさせていくということが極めて大事だと思います。強化できているようで、強そうで強くないのが子どもたちですから、すぐ挫ける。よろしくお願いします。今の社会に期待は出来ません。だから、私は治療後、早期より地域に戻して対応してもらおうというふうになりますけれども、一番は自分で自分を強化すること。例えば、小さいときから決まった時間に起きる、言われなくても勉強する、食事、洗濯など自分の事は自分でやるというような日常生活を確実にこなす習慣をつくっていくこと、生活能力をつけることが大事だと思います。

14. 世の中の現状とストレスへの周囲の対応

皆さんも知っていると思います。ストレスに対して母親の役割が大きいのです。それなのになかなかうまくいかないどころか、ただギャーギャー騒ぐ何もしない親がたくさん増えてきて、そして、周囲が分かったふりして、本当に分かってくれるわけではないのでそこを気をつけましょう。これ本当です。今の時代少し諦めですね。

防ぐには小さいときから、顔の見える安心な人間関係ができればいいのですけれども、それができていそうでできていない。気をつけないとならないのは、“いろんな教育関係者みたいな人がわかったふりして“噂の・・・”とかテレビやメディアで言っていますが、テレビなどに出ている人達は基本うけを狙う。タレントなんだ、タレント。聞いて楽しいかもしれないけど本質的にはどうしようもない話が多くなります。一番出来るのは実際にやっている先生たち皆さんです。だから自分たちに自信を持ってやっていくということが大事です。私たち医者の中でもしたことはないのにあたかも出来るようにしゃべっている人が沢山いますけれども、実臨床をやっているかどうか重要です。実際に手術していない、実戦をしてない医者は口は上手く、柔しいけれど迫力がないのです。テレビやネットの話は信じるな。だ

から皆さんは実臨床ではないですけども、実教育みたいなのをやっているわけですから、自分の経験を通して考えましょう。周囲の状況でいろいろ言われても、実経験のある人の話を聞き、評論家の話は気にしないで頑張りましょう。私もいろんなときに、民放やNHKなどテレビに出たりしているときがありますけれども、話す内容は台本で決まっています、それはうけを狙っているのです。メディアも質が変わったのです。熱中症もそうです。だから今熱中症に気をつけましょうと言っていますけれども、前話したように私達、体質が昔と変わってしまっているのです。部屋の環境、周囲の環境も変わってしまったのです。昔は日射病と言って、太陽かんかん照りのときしかなかったのですよ。だけど、今は熱くなくともどどんなっていますから気をつけましょう。昔の家と違ってすきま風はありません。道路もアスファルトだらけ。

ストレスに対しては子ども園というところから対応をしないと行かないのですけれども、生活の中で特に集団の中で自己肯定、自己効力、成長するということをやればいいのですけれども、それがなかなかできない。子どもの自己肯定を高めるよりも受け狙って、英語覚えたりという、本来の子育てからずれている。朝ちゃんと起きて「おはよう」の挨拶から始めて、体を動かし体験で能力を引き出す。だから、野菜嫌いの子どもたちというふうに言われてるけれども、小さい時から野菜食べてたら、そのまま野菜好きになってしまう。大事なことは自分でやることは自分でやって、自然の中で、地域の中で子どもや大人も入っているガヤガヤしながら、みんなで感じて成長していくという生活環境が大事だということです。今の時代は嫌がること、つつい途中でやめてしまいますけれども、途中でやめちゃ駄目。少しずつ頑張る、そんな日常の中で“**ストレス対応も子育て**”ですね。先ほどから何回も言いますが、時間がかかっても諦めない。ベースとして大事なことは見守るスキンシップです。オキシトシンという幸せホルモンが出ますから。そうすると苦しくともハッピーになって、“やったー”といういわゆるプラスの効果が出てくるのです。

15. 看過するなと発達障害、ストレス障害の流行と対応

今の時代は生活環境も変わっていますが、人が変わった。特に人間の傲慢さを見て見ぬふりをする看過は問題です。傲慢というと、トランプ、プーチン。皆さんは御存じだと思うけれども、好き放題。小さいときの生活環境が私達と違ったのです。好きなことがやれるような環境だった。北朝鮮の偉い人も生い立ち見て、聞いたりしてもそうですよね。そういう仲間同士で乾杯だもん、どうもしようもないよね。思いついたらやっちゃう。日本でも沢山あります。このときも問題なのは周囲なのです。周囲の人たちが間違っていることに対し、そうだよねと言うからおかしくなる。そんなことないよと言えばよかったですけれども、そうっていない。旭川でいじめにあって凍死（自殺）した子どものケースは、学校、教育委員会の知らないふり看過が問題です。誰かがきちんとやるということが大事。

何回も言いますが、要するに人間はいじめる動物なんですね。それがだいぶ前から度を越してきている。だから気をつけなさいといけない。このいじめは学校の問題ではなくて社会問題、いわゆる犯罪です。犯罪として捉えてやっていかないと駄目ですね、そのように

なっていったシステム自体が問題だと。地域とか学校に任せてしまっているけれども、国の問題です。アメリカではDCFSというところで、国としての対応している。世の中狂っているんだから、狂っているのに対してどうやって国が対応するかという問題です。カストロが広島原爆投下はテロであると言っても、日本人はあまり考えないでというか、あたらず、さわらず、事実に触れようとしない、集団虐殺なのに政治家が国が考えない。だからアメリカやロシアがどうのこうのといっても行動が少ない、黙殺がまかり通っている。唯一の被爆国なのに不思議なことがたくさんあります。国民そっちのけ。

だから今も、いろんなことがあります。スポーツも、オリンピックもそうですけれども、平和の祭典と言っているのに、毎年やっている広島原爆投下の黙祷なし、それが大きな問題にならずに何んともなく過ぎていく。そしてパラリンピックなのに相手の弱点をつくとはね。手がないから口にラケットくわえて卓球やっている人にとれないところに球をやるのはパラではないでしょう。オリンピックとパラリンピックを一緒にして金儲け。パラもアスリート願望、商売にしているところが問題。パラリンピックは多様性。勝ち負け関係ない。これを間違っ、勝つためだけに一生懸命やるっていうショーのようなスポーツと一緒にしてしまっ、パラの理念総崩れ。今あるスポーツビジネス、狂った勝利至上主義。

こんな金のまかり通る世の中ですから障がいが増えました。時代の変化、核家族化はまだしも、終身雇用パターンが崩れたあたりからどうしようもなくなった。日本は狂った。地域がなくなった。繰り返しになりますが、こんな中で人間が人間として生き残れるのはやっぱり地域しかないと思うので、地域で頑張る、地域がなくなったら日本崩壊だと思います。ですから、今、情報時代の中で便利追求だから何が正しいか分からないけれども、この間のauの通信障害もそうですけれども、便利はある時大きな不便、全部障がいになってくる。少し前まで障がいがない特別なような、そのような世の中になればいいな、なんて言っただけけれども、今はほとんど世の中障がいだらけ。右みても左みても障がいだらけ、どんどん増えてきている。いろんな障がいがたくさん出てきている。本人が不利益をこうむったら障がい、支援求めたりすると障がい、それに関して行政に余裕があれば確実に障害になる。福祉のバラマキ。流行は軽度発達障害とストレス関連障害と認知症、その他諸々。脳損傷がある障がいというより時代の流れの“流行”です。

16. 親も子も変わった治療責任、育成責任、教育責任とは

時代の変化で「大人の育成責任、教育責任」というのがなくなったような感じかもしれません。大事なことは、私たちは子ども達の小さい時から将来まで見ていくという気持ちです。

私はいろんな形でやりますけれども、病院がらみの医療だけでなく、遊んだり、食べたり、褒めたり、叱ったり子ども達の生活と連動してやっていくということになります。それが医療です。私には治療責任があるけど、ずーっとそばで診ている必要はないのです。皆さんも同じでしょうけれども、私も治療した子どもが、しばらくたって、ぽつんと現われてくる。あの重症だった子どもが苫小牧で救急隊員になっている、救急隊員が“先生、俺だよ”と言って、患者さんを搬送してきて感無量という感じですね。駅に行ったら“おはよう”とスト

レス障害で不登校だった子どもが駅員になって寄ってくる。この子は26歳になる重症の出血後水頭症の男の子です。出来ないことが多くて、そのとき保育園で一緒に遊んで面倒見てくれた女の子、その女の子と結婚すると外来に連れてきた、感無量です。子どもたちは宇宙人、私たちが昔は宇宙人ですけれども、子ども達はいろいろな可能性と思いやりを持っている。それを今の時代が潰してきた。少しでも出来なければ障がいにする。ちがう空間に入れて支援する。昔と考え方が違う。社会が変化している。なんでもやってあげる。

だからいろんなことを思い出しましょう。皆さんは多分こういう時代だったのかもしれないけれども、ビックリマンチョコ、親は変わっちゃって子どものために。親と対等でなくて、子どもが優位になってしまって、子どもが欲しがるカードの為にビックリマンチョコレート、長谷川先生買ったんですか、ビックリマンチョコレート、セットで。セットでみんな買っちゃって、そこからカードだけとって、チョコレートは捨てられる社会問題になりました。前話しましたが函館の事件です。子どもが言うことをきかないので途中で車から降ろした。少し経ってから戻ったら子どもはいなかった。その後この子は1人でずっと無人の自衛隊の宿舎にいたという、そういう時代になってきたのですね。「子どもも大人も時代も変わった」。大事なことは何回も繰り返しますけれども、こういう状態、生活になってきているのだという認識です。これはひどいよねではなくて、世の中の一般的な流れになっているのだということです。「大人も子どもも変わった」。それに対応していかないとならない。だから大阪メンタルクリニックの放火事件。本人も死んで詳細不明。だから拡大自殺したとか言ってますけれどもね。これは子育てに問題あったのか、多分発達障害があったというような話になっています。

17. 渡る世間は嘘だらけ・・・時代の流れがつくる障がい

子育てだけではありません。学問も嘘だらけになってしまいました。昔STAP細胞何回かできましたと言っていたけれども、1回は多分できたのだと思うのですけれども、沢山はできなかった。学者として本当は責任あるのですよ。やっぱり駄目でしたという事実を言わないとならないのですけれども、言わないまんまぶん投げたから嘘つきになります。嘘つくのは3歳からです。脳の約80%できて、周囲を認識、状況判断してきている。で、うそつき名人どんな人といったら、詐欺師ですね。うそを分からないでうそつきどんな人、政治家ということになります。うそついてどきどきする人は普通の人。で、うそつきは泥棒の始まり。嘘だらけで訳分からん世の中になっているのですけれども、訳分かっていることは今ハンディキャップじゃなくて支援が必要なら障がいという、本人が障がいといったら障害。つまり、障がいではないのに「現象で障がいになっている人がたくさん」いるので、それに対してどう考えるかということです。詐病ではないけれど環境性、心因性というか病状が出ています。

既に始まっている脳の変化はスマホの影響です。漢字が書けなくなった、あるあるです。今やスマホがないと生きていけないスマホ中毒が増えている。スマホ中毒になると脳が変化して、記憶する、推測する力がなくなって、思考停止になってギャンブル依存はじめ性格変

化、記憶障害につながってくる。人間は欲望に流され体を脳を壊す。これは前回出しましたけれども、私の高校時代でたばこは吸ったら駄目だったけれども、昔はくわえてもいいという時代、そこからいろいろありました。たばこをくゆらすこの文化というのも格好よく聞こえるかもしれないけれども、ここはちょっとごまかされているんだなと思います。煙草は体に絶対悪い、ハイライトにフィルターをつけたから大丈夫だよって。真っ赤なうそですね。これと同様のことがスマホにも言えます。私達はスマホの利点を活用しながら害を防ぐ。スマホがやめられないもありますが、我慢ができない。抑えられないを病気として認めるのが普通になった。物を取っちゃう、万引きしちゃう、止まらない。それ病気だよ、クレプトマニア。病気ではないけれども、病気にしてるというやつですね。ミュンヒハウゼン病、本人の思い込みで自分は大変と訴えて同情を引くとか、そして、子どもを病気にして私が大変とかの代理ミュンヒハウゼン症候群。そういうのも出てきている、自分もわからないくらい嘘だらけになってきている。

今、障がいの理解が広まってどんどん障がいが増えていくという。なぜだろうということですね。今65歳以上の約70%は何らかの記憶、認知障害がある。年令とともに記憶力が落ちるのを狙って色々商売とか福祉がらみで障がいになっています。5歳児健診まだ全ての地域でやっていませんけれども、半分ぐらいに問題、要支援があるというふうになっていますね。脳はピークが3歳でどんどんどんどん発達していくのですけれども、その能力を伸ばすことをうまくやっていなかった。上手くいかなかったら特別支援学級、特別支援学校があるので心配ないです障がい児。そのような時代になっております。だから特別支援学級が必要。

昔は生き抜いていかないとならないから、交通事故で脳挫傷、高次脳機能障害になっても計算できなくなっても、違う商売で生き抜き奥さんのために頑張って仕事して障がいにならなかった。障害あるけど障がいに気づかなかった。

そして、今どきはというか、やるが多すぎての障がいがある。どんどん子どもにいろいろと機会をつくって、部活や授業でスポーツをさせ文武両道で学力と、可能性と、ストレスに耐える力をつくるのはよいが、それに塾とか習い事とかになるのとやるが多すぎて何も出来ない。部活強制も意味がない。勉強以外は最低限パソコンの必修と一緒に手話とか大事な事をやればよかったのですけれども、それをやらないでゲームとスマホばかりになって、好き放題、あげくに学習障害、とんでもないことになっている。

18. 今の時代の障がいには2通り

要するに今や障がい複雑になって何でも障がいになって社会問題なのですね。障がいを大体外見や思い込みで判断することが大きな間違い。現実には障がいに2通り、明らかにハンディキャップがある場合と、現象で支援が必要になったら障がいになる場合がある。前者の場合の問題は、約50年前懐中電灯で頭照らして水頭症を調べてたのですけれども、今MRIで頭の中のことがほとんどわかる。それで画像所見から障がい決められハンディキャップを持つと親は思い込む。社会適応能力獲得の可能性はあるのについつい先読みされて、

駄目と諦め、障がいになる。有名な医療者側からみたペーパーがありますけれども、そうと決まったら母親はショックになって、なかなか立ち直れなくて、悲しみ、怒り、そのうちに諦め、再起してくるのが、親の気持ちだというふうになっているのだけれども、全然関係ありません。もともとショックを受ける必要なかったのですね。先ほどのEBMではないですけれども。本当は治せるよと、ちゃんと治るのに外見から無理と判断してしまっていたというところに問題がある。要するに訓練や自分で何とかしたら、社会適応能力を得るだけですから、それは多様性でよくなるんですけれども、他人にやってもらおうとするからなかなかよくなる。周りもやれば仕事はできるのですけれども、時間がかかる、歩けなかったら仕事させないとなるのです。この子も片麻痺はあるんですけども、仕事はできるのです。外見と能力は違います。大事なことは社会適応能力というか、仕事ができればよいということです。

人間は年齢とともに脳の中にこうやっっているところ、白いものが増えてくる。そして、前に話しましたがけれども、年齢たったら大体みんな同じ。それに、特に側頭葉という、海馬のところがやられたら、記憶が落ちて、怒りっぽくなる、認知症みたいなのが増えてくる、それが普通の高齢者の自然の流れ。今日できたことが明日できないのが高齢者。今日できなかったことが、明日できるのが子どもたちです。

もう一つは「現象」による障がいです。今の時代ですけれども、いろいろ思考停止で好き放題、家庭の中でも学校の中でも困ったちゃん、かまってちゃんが沢山いる時代になってしまった。一人遊びが得意、我慢できない、思うようにならなかつたら怒り、泣き出す。みんなと遊ぶということが難しい。しかし、関わり方次第でそのうちできるようになる、努力を学ぶというようになります。大変ですけれど、実際問題は小さいうちは無理やりなんとか子ども同士で遊ぶ機会を作って少しずつ社会適応能力をつけていく。

はじめは大人も子どもも一緒にやる。お父さん、お母さん、子どもと一緒にやる。そして、子どもにちゃんと話して、見通しつけさせて、起承転結を教える。子どもを育てるのに信頼関係をつくるということが大事。集団でやったらもっといい結果が出る。

なぜいららする、なぜ落ち着かない、なぜすぐ忘れるのか？これ、前頭葉や脳の深部に原因があるというけれども、前頭葉、扁桃体が問題なのかの前に「現象」ですから、その状況、今までのつくられた状況が問題になる。それを解決して「信頼」を創れば徐々に解決する。これ本当です。

脳の発達3歳で三つ子の魂で80%、6歳で90%、15歳で100%になります。だからそのときまでに何をやっていくかということは先生たちも含めて大事です。要するに20歳以前と20歳以降はやり方が異なります。20歳以前は言ったら覚えるという力がありますけれども、20歳以降は1日に10万個の神経細胞が死んでいくので、シナプスを伸ばすっていう、残っている細胞同士をうまく使っていくということがすごい大事になってきます。だから、年齢経つとすぐは覚えられなくなってくる。ただし応用力は伸びる。

19. ADHD、ストレス関連障害への対応とかけ引き

世界で一番貧しいウルグアイのムヒカ大統領が来日したとき、日本の問題点と地域への問題提起があり、インパクトがあったのですが、それをうまく生かしきれない日本でした。注意欠如多動性障害(ADHD)については種々の原因が言われています。一番多い原因は環境だと思えます。ADHDのチェック表があつて主にそれから診断するわけですが、受診するような子どもは大体あてはまってしまいます。これからは大人のADHDというも問題になっていきます。

そして本日のテーマ、今の時代難しいのはストレス関連障害、適応障害。雅子様もそうですし、あ、美智子様もそうです、この適応障害。地域の中で信頼のある、顔の見える空間でメンタルを強化する。それしかないのではないかなと思います。ストレス関連障害の対応もかけ引きです。

対応ですが、状況によっていろいろな方法がありますけれども、まずカウンセリング、それで上手くいかなかったら投薬、安定してきたら薬をやめるとか、いろいろな方法が出てきています。治療を開始するタイミングはいろいろ、人間関係の悪化とか、学力の低下が目立ってくるという場合は薬による治療が開始になる。足りないのは落ち着きと集中力ですから、その集中力をつけるということが大事になります。投薬は、生活の中で行動が安定するために様子を見るということではなくて、ドロップアウトを防ぐということなのです。子どもの1日は大人の1週間ですから時間が大切です。その中で何をさせ、何を得るか？医療も、教育もかけ引きです。

20. We are 「Pilot」・・・

障害あつても、低酸素脳症で脳の全体にダメージがあつても、小脳、脳幹が生きてたら小脳の記憶力で泳げるようになってたりします。いろんな形で体幹バランスをつくってくこと

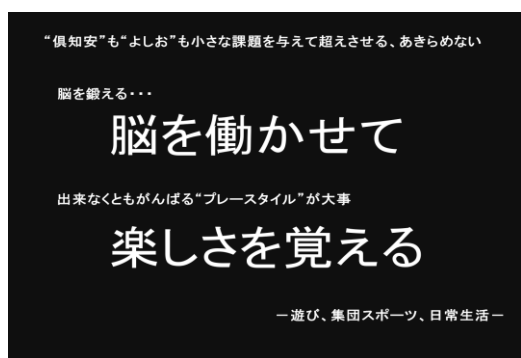


図14

によって能力が出てきます。大事なことは脳を働かせて楽しさを感じるということです。体で覚える。薬も大事ですが、実際に何をさせるかが重要です。大事なことはやはり学校、養護の先生含めた、看護師さん含めた、医療教育連携チーム力です。だからわからないことがありましたら当方に遠慮なく御連絡ください。子どもを中心としたチーム、その中で母親がポイントゲッターです。少なくともプールを利用しての活動は能力を引き出す(図14)。小中高一貫教育は、みんな家族だという観念の中でやればいい。

これは脳が半分なくなった子ですが、3歳以下で生じた脳損傷は大体カバーでき、麻痺も分からなくなつてよくなったという話です。大学卒業、今年就職しました。

「医療も教育もまだまだわかってないことだらけです」。人生はいろいろなことがあります。そして、人の特徴は挑戦、チャレンジする、そして仲間がいる動物だということです。だから「私は水先案内人「Pilot」なのです」。先生達もそうです。今の時代が変になってきて

いるのですから、それを捉えてどうするかということが非常に大事なのだと思います。そして新たな一步を踏んでいかないと遅いのですね。やっていかないとならない。「脳は使わないと変化して、やがて働かなくなります」。

これハイジで、この子はクララです。クララはストレスで歩けなくなって車椅子になったのですけれども、ハイジと一緒に困難を乗り越えることを通して歩けるようになった。助けたということですね、信頼ですね。ストレス関連障害もどんどん増えています。

学校で急におなか痛いとか、頭痛いだとか、そのようになったとき、それを理由に学校を休むと言った時、ストレス関連障害というのがベースにないかということをやっと考えていかないとならない。先ほどの話にありましたけれども、睾丸捻転がどうのという、痛みがひどくて緊急のときはわかりやすいけれども、なんとなくという痛みの方は原因を調べることが大事ですけれども、それがなかったときは今の時代はやっぱりストレス関連障害というのを気にしていかないとならない。昔はおなか痛かったのですけれども、今は頭痛い、手しびれる、手が震える、いいですか。だから、はっきりした原因がなくてそのようになったらストレス関連障害の可能性が強いということです。これは仮病、詐病ではなく1種の現象、病気です。

ストレス関連障害には、急性ストレス反応、適応障害、PTSD（外傷後ストレス障害）や抑鬱、フラッシュバックなど様々あります。

増えているストレス関連障害、身体表現性障害は体にいろいろな症状が出てくる。昔は大体40代から60代くらいの女性に見られたのですけれども、バス停や人が多くいるところで急に倒れるとかだったのですけれども、長谷川先生の時代はそういう感じだったのですけれども、今はもう、年齢に関係なく幼稚園児、小学生から時間、場所関係なく始まっていますから。ちょっと前までは中学生、高校生だったのですけれども、就学前、小学生からも見られ増えています。カウンセリングというのではないのですけれどもそれが重要で、やっぱり「傾聴」、そして、アドバイスで「信頼関係」をつくるということが大事です。先生たちも子どもの能力を期待して頑張れと言ったりするとストレス障害になったりしているときもあります。しかし、状況的に仕方がないので期待して全然構いません。そういう中で子どもたちがいっぱい、いっぱいにならないでゆっくり進む、少しずつでいいんだと、どうやってやっていくかを学ぶということが大事です。

要するに、今の子どもたちはストレスに弱いということです。何か頑張らなさいよと言われただけでも、弱くなってしまうというところがある。頑張れは頑張れでいいと思います。症状が出たらどうやってやるか？そのあとの対応が大事です。症状が出てもいいんです。

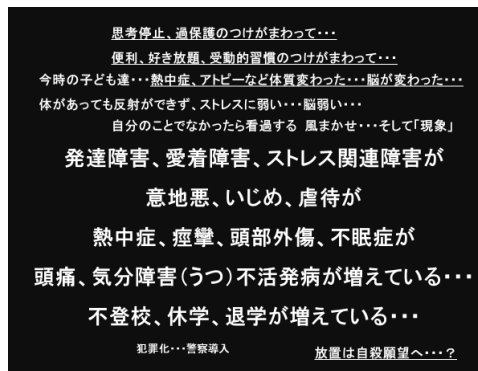


図15

本日のまとめとして社会的要因結果として、「現象としての発達障害」「ストレス関連障

害」(病気?)が急速に増えている。それは関連して不登校とか、そのような問題にもなっている。頭部外傷、頭痛、発達障害、次に多いのがストレス関連障害、チック、昔はなかった家では喋るが学校では喋らない場面緘黙症、また機会があったらお話しできればと思います。このような状態にはストレスがその影にあります。よいストレスと悪いストレス、これは教科書的なやつですね。ストレスで適応障害、睡眠障害になる。心のスキルアップとかいろんな方法があると思いますが、皆さん御存じのように大体うまくいきません。大事なことはベースになる、例えば先生と子どもさんもそうですけれども、スキンシップと信頼関係ということです(図15)。

ストレス対処法としては認知行動療法、状況を分析して、それに対応していく。認知行動療法は大事です。あとコーピングとか、いろいろありますけれども、この辺は子どもや何かも含め、大人がやっても結構きついと思うから、なかなかできないと思います。あと薬物療法とかありますけれども、勧めません。休むという方法がありますけれども。休んでいる間は落ち着くんですけども、結局は治りません。表面上落ち着いてから時間をかけてどうやって対応するかということ学ぶことが大事です。現実的には焦りながら対応、難しいですけどみんなで頑張る。「1人じゃないんだ」が大事です。

多分小さなときからレジリエンスというやつを育て、ストレスをどうやってうまく解消するかということ自分を自分でいけることが出来ればよかったですけどもそうじゃないのが現実です。つまり今の時代、やっかみや嫉妬などがからんで複雑になっていじめというような感じになっている。その結果孤独とあいまって、更にモラハラ、パワハラ、メディアを含めた社会的影響によっていろんな症状、現象が出てきますから、私たちはそれにどうやって対応するか。私たちは今の狂った時代の中のファーストペンギンなのですね。挑戦です。どうすればよいのかまだ答えは出ていないです。

人間の社会、日本の社会は嘘だらけで大変です。信念がない。昔こうやって、これ何でしたっけ。あみだ……。あみだばあか、タケちゃんマンと、ですね。いいですか。俗悪番組をやっていた、ビートたけしとか。悪いやつと言われていたけれども、もう今はそんなこと忘れて?尊敬される人、立派な人になってしまっているね。今はNHKまでもが、チョコちゃんが「ポーっと生きてんじゃねえよ」とうけを狙って悪い言葉を使ってよいになっている。あみだばああおのときに何が悪かったかというのは、ばばあ、じじいという呼び方なのですね。ひどいのは、くそまでつけてしまっているということ。それが今や普通になってまかり通っている、楽しければいいではないですね。金もうけ、つまり商売とのからみが悲しいですね。難しいですね。子育てがメディア、SNSに影響される。

少なくとも子どもはそして皆さんも、宇宙人、地球人ですからいろいろ可能性はあります。人間の生き方をどのようにしていくかというこ

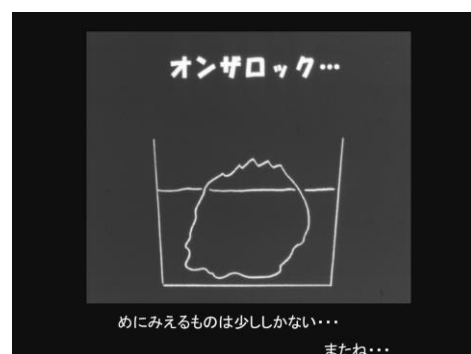


図16

とを、小さいときから将来を見ながらどうやってサポートしていくかということがこの複雑な時代の中極めて重要だと思います。

目に見えるものは少ない。だから、状況を読んで対峙することと、未来を推測して挑戦することが大事になると思います。今日は、懇親会があったりすればいいのでしょうけれども、まだコロナで出来ないの、頭の中でイメージして懇親会にしてください。次回もし機会がありましたらいろんなケースを述べて、それに対してどうしてやっていくか、意見交換ができればいいと思います。目に見えているものは少ないのです（図16）。

私も18年前、地域に出てきて「約5年間ぐらいは地域の人とも連携して地域の子ども創りができましたけれども、なかなかうまく継続しないのが現実です」。医療体制も苫小牧に来る前に戻ってしまいました。今の苫小牧が語るように、何もしないでコツコツ働くより文句を言っているほうが楽だからです。

皆さんが頑張ってもなかなか周囲が応援してくれなかったりがあるかもしれないですけども、深く関わってくれたことを子どもは覚えていますから子ども達が大人になったとき、感無量で返してくれます。子どもの未来を守ろう。私達は「Pilot」です。

終わります、ご御静聴ありがとうございました。